

# 巻 頭 言

村田 貞博(Sadahiro MURATA)

(公社)日本パブリックレーションズ協会関西事務局長 大阪経済法科大学客員教授)

タヌキの焼き物で知られる滋賀・信楽を舞台にしたNHKの朝の連続ドラマ「スカーレット」。ヒロイン・川原喜美子が陶芸家に成長していく姿が人気を呼んでいる。陶芸は“炎の芸術”と言われるが、食器や壺など身近な生活用品として古来より存在し、産地(窯元)は全国に点在する。朝ドラの信楽焼は土が主原料の陶器だが、もう一つの焼き物、磁器は洞窟と繋がりが深い。各地に点在する知られざる洞窟と磁器(陶石)との関係を紹介し、環境洞窟ネット学会紀要の巻頭言とする。

陶磁と磁器は、どちらも焼き物だが、原料に大きな違いがある。陶器は、陶土(粘土)を主原料としているが、磁器は岩石(陶石)を粉砕した石粉(ガラス材料の長石、けい石を含有)が主原料である。このため陶芸界では、陶器を「土物」、磁器を「石物」と呼んでいる。陶器は通常焼成温度800~1200度で焼き上げ、熱しにくく冷めにくい特徴がある。代表的なものは信楽焼や備前焼、萩焼など。一方、磁器は約1300度の高温で焼き上げ、陶器の逆の特徴を持ち、有田焼、九谷焼、砥部焼など有名である。陶器か磁器かは色合いや透明度、硬度、重さなどで見分けることができ、叩いた時に鈍い音がすれば陶器、金属的な高い音がすれば磁器と判別できる。

創業400年を迎える磁器の代表、有田焼。有田町近郊にはかつて陶工達が刻んだ原料採掘地が散在する。その代表格ともいえる泉山の岩肌には無数のノミ跡が残っており、陶石を砕いて陶土を作るために穿った唐臼の柱の穴や釉薬発掘の跡は巨大な洞窟を形成している。この洞窟に棲み着いた蝙蝠は、吉祥文様として有田焼の図柄にも登場する。地元の有田焼陶芸協会では「洞窟は先人陶工達の足跡であり、現代まで連続と続く有田焼400年の歴史そのもの」とする。

江戸時代、長崎・平戸藩の三川内皿山で焼かれた極薄手の最高級磁器「卵殻手」。領内の針尾島の洞窟跡地で発見された網代陶石が原料で、その薄さが卵の殻並みからネーミングされた。長崎出島に立ち寄ったカピタンの目に留まり、「エッグシェル」と呼ばれて欧州へ輸出され、珍重された。その後、製造技術が途絶えていたが、2006年に再現に成功し、2009年には皇太子殿下(現天皇陛下)に献上されている。

2006年、日本遺産に登録された石川県小松市の「珠玉と石の文化」。この地では弥生時代の碧玉作りに始まり、2300年間にわたり金や銅の鉱石、メノウ、水晶などの貴石、九谷焼原石の陶石などを産出してきた。同市花坂地区は知る人ぞ知る九谷焼の原石採掘場で、採掘後の石切場、洞窟は水が溜り、光の反射でさながら「青の洞窟」と呼ばれている。

国の指定名勝地、長崎県天草市の妙見浦。ここにある妙見洞門と妙見洞窟は中新世(2300万年前~500万年前)に流紋岩( $\text{SiO}_2$ が70Wt%以上のもの・リソイダイト)が貫入し、その後、火成活動の影響で絹雲母やカオリンなどの粘土物質に変質した。これが江戸時代、蘭学者で地質学者でもある平賀源内が「天下無双の上品」と絶賛した天草陶石である。高い強土で仕上がり美しいのが特徴だ。1650年頃に始まった古内田皿山窯跡は、有田に次いで磁器では日本で2番目に古いとされている。

最後に、洞窟と磁器を巡るエピソードを紹介する。2118年7月、タイ北部の洞窟に閉じ込められた少年13人の救出活動で、一役買ったのが日本製の蓄光磁器「ルナウェア」である。コドモエナジー社(大阪市、岩本泰典社長)が開発したセラミック製の特殊磁器で、電気なしで高い発光性があり、長時間の使用と耐水性に優れている。事故現場の洞窟内は降雨で水が溜り、救出隊は暗闇の水面下を潜る手立てに窮していた。たまたま岩本社長がセールスでタイを訪問中で、即座にルナウェア600個を現地対策本部に寄贈。洞窟内の水路の灯りとして使われ、全員救出の快挙に繋がった。ちなみにこの蓄光技術、有田焼の伝統的な釉薬を塗る技術を応用したものである。

古来、洞窟は住居をはじめ様々な形で利用されてきた。焼き物(磁器)の関係では、天然洞窟が貴重な原材料(陶石)の採掘現場として、また石切場が採掘後に洞窟化している事例が多々ある。前述の小松市の如く、今も伝統と文化が息づいている地域も少なくない。こうした事例は当該産地の研究資料などから引用しており、洞窟研究の大家である沢 勲会長の知見には遥かに及ばないが、自ら更なる精進を期するところである。

2019 洞窟環境 NET 学会総会と講演会 大阪グランビア HOTEL



小山 博



近江 巳記夫



熱田 親熹



由良 薫



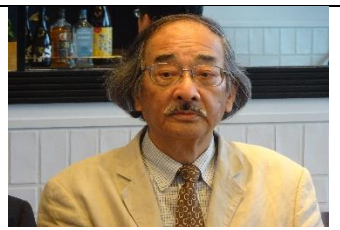
中 良紀



八頭司 彰久



岩見 幸生



久森 洋昭



鈴木 實



西村 純一



古谷 昭雄



沢 勲